

幻覚の可能性と素朴实在論 : Fish とSmith

| | |
|----------|---|
| 著者 | 横山 幹子 |
| 雑誌名 | 図書館情報メディア研究 |
| 巻 | 11 |
| 号 | 2 |
| ページ | 23-35 |
| 発行年 | 2014-03 |
| その他のタイトル | The Possibility of Hallucination and Naive Realism : Fish and Smith |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/00122344 |

幻覚の可能性と素朴实在論：Fish と Smith

横山幹子

The Possibility of Hallucination and Naive Realism: Fish and Smith

Mikiko YOKOYAMA

抄録

われわれは、われわれの感覚経験は心から独立した対象についてのものであり、われわれはそれらの対象に直接気づくことができると考えている。そのような考え（素朴实在論）は自然であるにもかかわらず、多くの哲学者は、幻覚の可能性のために素朴实在論は偽でなければならないと論じてきた（幻覚からの議論）。しかし、近年、素朴实在論に賛成して議論する哲学者が出てきた。Fish と Smith は、異なるやり方で、素朴实在論（直接实在論（Smith））が幻覚の可能性と矛盾しないと主張している。私は、素朴实在論を擁護することに興味がある。それゆえ、本論文では、素朴实在論を擁護するためにはどちらの考えが適切かを検討し、幻覚からの議論への Fish の返答（選言説）が不適切ではないと述べる。

Abstract

Many people think that our sense experiences are of mind independent objects and we can be directly aware of those objects. Although such an idea (naive realism) is natural, many philosophers have been arguing that direct realism must be false because of the possibility of hallucination (the argument from hallucination). Yet, some philosophers have recently argued for naive realism. Fish and Smith claim that naive realism (direct realism (Smith)) is compatible with the possibility of hallucination differently. I am interested in defending naive realism. This article therefore examines which is reasonable to provide a defense of naive realism and claims that Fish's response to the argument from hallucination (disjunctivism) is not unreasonable.

1. はじめに

われわれは普段、世界にはわれわれの知覚や思考から独立した対象があり、われわれの感覚的経験はその対象についてのものであると考えている。たとえば、今私が窓の外の木を見ているとしたら、私の経験は私の心から独立した現実存在する外的な対象である木についてのものであり、私はその木に直接気づいている（その木の存在や状態を知っている）と考えている。ここでは、このように、「われわれの知覚的経験は、われわれの心から独立した対象についてのものであり、たとえ例外的に知覚的誤りがあるとしても、大抵の場合、われわれの心とは独立に存在する外的世界の対象（物理的対象）に、われわれは知覚的に直接気づくことができる」と考える立場を素朴实在論と呼ぶ。そのような意味で考えられた素朴实在論は日常では当たり前のことのように思える。しかし、哲学においては、素朴实在論は幻覚や錯覚が存在することと矛盾し、それゆえそれは間違いであると論じられること¹が多い。しかし、素朴实在論の偽を認めることは、先に見たように、われわれの日常的な直観に反することになる。そのうえ、それだけではなく、それは、外的世界に対する懐疑論にもつながりうる。なぜなら、素朴实在論の代わりに間接实在論（知覚の直接の対象は、たとえば、センスデータ²のような内的な実在であり、われわれは間接的に外的対象に気づいているとする）をとるなら、直接知りうるのは内的なものだけになるので、外的世界の対象をどのようにして知るのかという問題が生じ、それにうまく答えることができないなら、われわれは外的世界の対象についての本当のことは何も知ることができないということになりうるからである。そのような懐疑論を避ける一つの道は、素朴实在論を擁護することである。それゆえ、本論文では、幻覚や錯覚の存在にもかかわらず、素朴实在論を守ることにほどのような考えが適切なのかについて考察したい。ただし、ここでは議論を幻覚の場合に限定する。なぜなら、確かに、幻覚も錯覚も真正な知覚が失敗している場合であるが、それらは外的対象がある場合とない場合に分けられ、それぞれ別に考えたほうがよいと思われるからである³。

幻覚をどのように扱うかについてはさまざまに論じられてきたし、知覚的誤りについて論じたことで有名な Ayer 以来の議論に限ってもさまざまなものがある。Hinton⁴によって提示されたと言われ、近年さまざまに議論されている知覚の選言説（経験を心から独立した対象についてのものだと考え、真正な知覚と幻覚や錯覚が共有する共通の要素（センスデータ等）を認めず、知覚

的誤りを選言によって説明しようとする立場）によって素朴实在論を擁護しようとする方策も、その中の一つである⁵。その中でも代表的なものは、Martin や Fish の議論⁶である。Martin に関しては、さまざまな人がその議論の問題について論じており、問題が論じられているということは、Nudds⁷によってまとめられている。我が国の最近の議論では、小草泰の「知覚の志向説と選言説」⁸がその問題と関係している。そこでは、知覚についてのもう一つの主要な説である志向説と選言説が比較検討され、選言説を動機づけているものは志向説を排除するものではないと論じられており、その際、Martin の動機づけも検討されている。私自身も、以前、選言説が幻覚をどのように説明できるのかに関する Martin 流の否定的認識論（negative epistemics：幻覚的経験は、真正な知覚的経験から反省的に区別不可能な状態であること以外の何ものでもなく、積極的な特徴（肯定的特徴）を持たないと考える立場）の意義と問題点について、Strugeon や Hawthorne と Kovakovich の見解を参考に論じた⁹。また、選言説の立場から幻覚の存在が素朴实在論と矛盾しないと論じている Fish の考えが Siegel の批判に耐えうるのかも考察した¹⁰。しかし、Martin に関する議論に比較すると、Fish に関する議論は少ない。本論文では、幻覚の存在に対して、選言説の立場から素朴实在論を擁護しようとしている Fish の議論を検討する。そして、そのために、志向的对象を考え、選言説以外の立場から幻覚の存在を説明しようとしている Smith の議論¹¹とそれを比較する。なぜなら、素朴实在論は選言説と結び付けられて考えられることが多い一方で、Smith は、本論文での素朴实在論に相当すると考えられる直接实在論を主張したうえで、選言説による幻覚の説明を批判しているからである。本論文の目的は、そのような比較検討を通して、素朴实在論を擁護するための方策として選言説が一つの有効な選択肢になりうるということ論じることにある¹²。

そのために、まず、Martin、Fish、Smith の考える素朴实在論や直接实在論がどのようなものであり、どのような関係にあるのかを簡単に説明することによって、本論文で擁護したい素朴实在論がどのようなものであるかを示す。なぜなら、Fish と Smith の考えの比較検討が一つの目的であるので、両者がどの程度同じものに関係しているかを確認しておくことが重要だからであり、Fish の考えは、Martin の考えと密接に結びついているからである。次に、Snowdon の見解¹³を受けた、Fish の定式化や Smith による定式化を参考に、素朴实在論に反対する、幻覚からの議論がどのようなものである

かを確認する。それから、Martin の考え¹⁴を参考にしながら、選言説について説明し、それを受けて、まず、Fish の選言説による素朴实在論擁護を、さらに、Smith による素朴实在論（Smith の言葉では直接实在論）擁護を整理する。そして、最後に、それらを比較検討することで、素朴实在論を擁護するための方策として選言説が一つの有効な選択肢になりうるということを論じる。

2. 素朴实在論

心から独立した外的世界があることを認める考えが、一般には、哲学での素朴实在論であると言われる。確かに、そのような素朴实在論の説明は間違っていないが、ここで論じる素朴实在論の規定としては、曖昧である。それゆえ、ここでは、本論文での議論の手がかりとして後に詳しく見る、Martin や Fish や Smith らの考えを参考に、ここで論じる素朴实在論がどのようなものかを示しておきたい。

まず、Martin の考えを見てみよう。彼によれば、素朴实在論とは、「知覚の際、心から独立した対象が心の中にあらわれうる（can be present to the mind）ということに同意し、・・・人がそのような経験を持っているとき、その対象は現実存在し、純粹に心の中にあらわれなければならないということに同意する見解」¹⁵のことである。その考えによれば、知覚の対象は、その経験的状況の構成要素なのである。そして、その素朴实在論では、「人の知覚的経験の内省は、心から独立した対象、質、関係だけを示し、それらについて、人は知覚を通して学んでいるということ」¹⁶を、知覚の対象によって説明することができる。

次に、Fish の考えを確認する。彼は、「真正な視覚的経験の現前的特徴（presentational）は、主体が見ている物理的世界の要素によって構成されており、この経験の現象的特徴は、主体にこの現前的特徴を直知させるというその性質である」¹⁷と考えるのが、素朴实在論であるとする。彼によれば、現象的特徴とは、「ある経験を持つとはどのようなことかによってその経験をタイプ付けるその経験の性質」¹⁸であり、現前的特徴とは、「ある経験を持つ際に主体に提示される、そして、それによって、その経験を持つことがどのようなものであるかということの特徴付けている性質の（ことによると、対象の）集まり」¹⁹である。彼によれば、われわれの持つ経験の現前的な特徴が心から独立した世界の特徴によると考え、経験の現象的特徴を、現前的特徴を直知させるという性質だと考えるのが、素朴实在論なのである。

最後に、Smith の考えを見ておきたい。彼によれば、素朴实在論は、「知覚の際、われわれは常に世界が正確にそうであるように知覚しているという見解」²⁰を表すことがあるが、それは信じがたい。彼は、そのような考えと区別する形で、直接实在論という考えを示している。彼の言う直接实在論とは、物的世界は、認識されることに依存しない存在を持ち、われわれはそれに直接気づくことができるという主張である。

以上のように見てくれば、Martin の考えと Fish の考えに共通点が見られることがわかる。どちらも、知覚によって心から独立した対象を学んでいるということ認めている。そして、そのことを知覚の対象それ自体によって説明している。Martin によれば、知覚の対象は知覚的経験の構成要素なのであり、そのことによって心から独立した対象を知ることができる。Fish によれば、心から独立した世界の特徴によって構成されている現前的特徴を直知しているから、われわれは、心から独立した世界について知覚によって知りうるのである。知覚的経験の現象的特徴はどのようなものかに関する、このような素朴实在論の考え方は、第一章で述べた、われわれの経験は心から独立した対象についてのものでありわれわれはそれに直接気づくことができると考える立場としての素朴实在論の考えを含んでいる。一方、Smith の言う素朴实在論は、あまりに極端すぎて、それを素朴实在論として守ろうとすることには無理があるように思える。ここで問題にしたい素朴实在論は、Smith の言う直接实在論に似ている。

本論文では、第一章で述べたように、「われわれの知覚的経験は、われわれの心から独立した対象についてのものであり、たとえ例外的に知覚的誤りがあるとしても、大抵の場合、われわれの心とは独立に存在する外的世界の対象（物理的対象）に、われわれは知覚的に直接気づくことができる」と考える立場として素朴实在論を捉え、知覚の失敗にも関わらず、素朴实在論を擁護できるのかを考えていきたい。Martin や Fish の素朴实在論は、本論文の素朴实在論の規定を含むので、知覚の失敗を認める一方で、彼らの言う素朴实在論を主張することができるなら、知覚の失敗を認めても本論文での素朴实在論を主張できる。また、Smith が、知覚の失敗を認める一方で、彼の言う直接实在論を主張できる場合も、知覚の失敗と素朴实在論の主張は両立しうる²¹。

3. 幻覚からの議論

素朴实在論が偽だと論じる幻覚からの議論とはどのようなものなのだろうか。ここでは、二つの定式化を見て、そこから見て取れる幻覚からの議論の構造を確認しておきたい。

一つ目は、Snowdon の見解²²を受けた Fish の定式化²³である。彼によれば、幻覚からの議論は、幻覚の場合に素朴实在論が偽であることを主張する「土台 (base case)」とその偽を真正な知覚を含むすべてに広げる「拡張段階 (spreading step)」の二つの部分からなる。たとえば、視覚的な幻覚の場合、見られるべき適切な外的対象がないのに主体はそれがあるかのような視覚的経験を持っているのだから、その幻覚的経験の現前的特徴として現れるのは、物質的世界の要素によって構成されたものではなく、素朴实在論は偽である。しかし、一人称にとっては、知覚的経験と幻覚的経験は似ていて区別できない場合がある。ここで、それらの経験的類似性を認めるならば、真正な知覚を含む全てのものに関しても、同じ可能性がある。そのようにして、幻覚の場合素朴实在論が偽であるという考え（土台）は、真正な知覚を含む全てのものに拡張されるのである。

それは、次のような場合を考えてみるとわかりやすい。花子さんが目の前に椅子がないのに、目の前に椅子があるような幻覚的経験を持つとしよう。この場合、見られるべき適切な外的対象、「椅子」がないのに花子さんは椅子があるかのような視覚的経験を持っているのだから、その「椅子があるように見える」という経験の現前的特徴として現れているのは、物質的世界にある椅子ではなく、素朴实在論は偽である。けれども、そのような経験と本当に目の前に椅子があるときの知覚的経験が花子さんにとってとても似ていて、彼女がそれらを区別できないということは考えられる。だとするならば、後者の場合も、その経験の現前的特徴として現れるのは、物質的世界にある椅子ではなく、素朴实在論は偽であると言えるのではないか、というのである。

二つ目は、Smith による定式化²⁴である。彼は、先に見たように、物的世界は、認識されることに依存しない存在を持ち、われわれはそれに直接気づくことができるという主張を直接实在論と呼び、幻覚からの議論は、その直接实在論の、すなわち本論文で素朴实在論と呼んでいるものの偽を示そうとしていると論じる。彼によれば、幻覚からの議論の第一ステージは、幻覚は可能だということであり、第二ステージは、幻覚している主体は何かに気づいていて、それは普通ではない対象だということ

であり、第三ステージは、幻覚について真であることをすべての知覚的経験に一般化することである。たとえば、「椅子」についての真正な知覚的経験に関して、それと主観的には区別できない幻覚的経験が可能であるとするなら、幻覚している主体が気づいているのは、外的対象としての「椅子」ではない。そのことを、幻覚的経験の場合だけでなく、すべての知覚的経験に一般化しようとするのが、幻覚からの議論なのである。

上記の両方の定式化には、共通してみられる幻覚からの議論の構造がある。つまり、後者の定式化の第一ステージと第二ステージを前者の定式化の土台の一種と考えることができる。そのように考えるならば、幻覚からの議論は、幻覚の場合素朴实在論は偽であるとする土台と、それを一般化する拡張段階に分かれる構造を持つと考えることができる。

4. 選言説

選言説について、それを初めて提唱したのは、先に触れたように、Hinton であると言われており、その選言説は、Martin や Snowdon や McDowell らによって主張されている。しかし、それらは全く同じというわけではない。ここでは素朴实在論擁護という目的のため、素朴实在論擁護を全面に打ち出している Martin の選言説を確認する。その考えは、Fish にも通じる。

Martin は、「経験の透明性」²⁵の中で、感覚知覚 (sense perception) についての選言説について説明している。

Martin によれば、選言説とは、「人の経験は、人を心から独立した世界に関係させるが、それは非表象的なやり方である」²⁶と考えるものである。つまり、その説では、経験を心から独立した対象についてのものだと考えるが、経験が心から独立した対象についてのものであるのは、経験が心から独立した対象を表象しているからではないと考えるのである。その考えは、真正な知覚的経験と幻覚的経験が内省的に区別できないとしても、真正な知覚と幻覚や錯覚が共有する共通の要素があるわけではないとする。そうではなく、両者に含まれている経験は根本的に違う種類に属していると考えるのである。つまり、選言説の場合は、「椅子」の真正な知覚的経験と「椅子」の幻覚的経験が内省的に区別できないとしても、それが同じ表象であり、後者の場合は間違って表象しているとは考えず、「私は椅子を見ているように見える (seem)」という陳述を「私が椅子を見ているか、そうであるかのように私に見える (seem) かのどちらかである」という選言を表すものと考え、「椅子」の真正な知覚的経験

と「椅子」の幻覚的経験は根本的に違う種類に属していると考えるのである。そのように、それは、「私はF（ここでは、知覚の対象を示す変項）を見ているように見える（seem）」という陳述を「私がFを見ているか、そうであるかのように私に見える（seem）かのどちらかである」という選言の短縮形として扱おうとしているために、選言説と呼ばれる。

5. 選言説による素朴实在論擁護

5.1 Martin

幻覚からの議論から素朴实在論を守ろうとする近年の代表的な立場は、Martin による選言説である。本論文では、主に Fish の選言説による素朴实在論擁護を手がかりの一つとして、素朴实在論を守るためにはどのような知覚についての考えがふさわしいかを考えることを目的としているが、Fish が Martin 流のやり方ではうまく行かないだろうと考えて自説を提出していることを考慮し、先に簡単に Martin による素朴实在論擁護がどのようなものであるかを確認しておきたい。

Martin は、「疎外されていることについて」の中で、「(I) 私が今、たとえば白い杭のフェンスそのものを見ているとき、持っている特定の種類の経験のどんな事例も、もし私が白い杭のフェンスのような心から独立した対象を知覚しないなら生じえないだろうに」²⁷ という主張、「(II) 白い杭のフェンスの視覚的経験とは、白い杭のフェンスそのものの真正な視覚的知覚から反省によって区別されることのできない状態のことである」²⁸ という主張、「(III) 白い杭のフェンスについてのものであるかのような視覚的経験、つまり、因果的に一致している幻覚 (causally matching hallucinations) の場合、対応している白い杭のフェンスそのものの視覚的知覚から区別されないという特徴以上に、そのような経験の現象的特徴に付け加えるものは何もない」²⁹ という主張の、三つの主張が選言説を構成する基本的な主張だと論じる。つまり、感覚的経験を出来事であると考えたら、知覚の対象はその出来事の構成要素であるという意味での素朴实在論を認め、真正な知覚的経験と幻覚的経験に共通する要素を認めることなく感覚的経験一般について考えることができると考え、幻覚のように知覚が失敗しているような場合の感覚経験は、真正な知覚から反省的に区別不可能な状態であること以外の何ものでもないと考えるのが、選言説の特徴だと言うのである。

(II) に「反省によって」という制限が入っているということは、注意されなければならない。反省以外で知ることができてもそれは問題ではない。たとえば、私が

ヴァーチャル・リアリティを体験する施設に誰かを連れて行き、これからヴァーチャル・リアリティを体験するとその人に告げ、その人を装置の中に入れ、オレンジの幻覚を体験させるとき、その人は、オレンジの幻覚を、私の証言 (testimony) によって、幻覚であり、真正な知覚ではないと考えるだろう。証言によって得られた付加的な情報は、「反省によって」得られるものではない。

選言説を以上のように特徴づけたうえで、Martin は、内省的に真正な知覚的経験と幻覚的経験が区別できない可能性を認めたとしても、それを両者が何らかのものを共有しているためだと説明する必要はないと論じる。そうではなく、それぞれの経験を根本的に異なる種類のものとし、それぞれに異なる説明を与えることによって、素朴实在論を守ることができるというのである。そして、彼によれば、幻覚のように知覚が失敗しているような場合の感覚経験は、真正な知覚的経験から反省的に区別不可能な状態であること以外の何ものでもないという説明が与えられる。

5.2 Fish

Fish も、素朴实在論を知覚的経験は物的世界の要素によって構成されたものであると捉えたうえで、選言説をとることにより、素朴实在論を守ろうとしている。ここでは、彼の考えについてまとめたい。

Fish は、幻覚からの議論の土台、すなわち、幻覚の場合素朴实在論は偽であることを認めたうえで、一人称による区別不可能性によっては拡張段階に進むことはできないとする。選言説をとることによって、一人称によって区別不可能であるとしても、真正な知覚の場合の心的状態と、区別不可能な幻覚に含まれる心的状態は異なる種類のものだ主張し、拡張段階、すなわち、幻覚の場合に当てはまることを全ての知覚に当てはめようとすることを防ごうとするのである。

Fish によれば、「私はFを見ているように見える (seem)」という陳述を「私がFを見ているか、そうであるかのように私に見える (seem) かのどちらかである」という選言の短縮形として扱うとする選言説の提案は、真正な知覚の場合の心的状態が、区別不可能な幻覚に含まれる心的状態と異なる種類のものであるという考えと矛盾しない。彼は次のように言っている。「選言説の背後にある中心的な考えは、真正な知覚の場合に含まれる心的状態は、区別不可能な幻覚に含まれるものとは全く異なる種類であるということ、もしくは、真正な知覚とそれと区別不可能な幻覚の両方の場合に共通ないかなる心的状態もないということである。」³⁰ そして、彼によれば、

幻覚からの議論の拡張段階は知覚的経験と幻覚的経験の経験の類似性から幻覚の場合に当てはまることを真正な知覚を含む全ての場合に当てはめようとするものだから、真正な知覚的経験と幻覚的経験が区別不可能であるとしても異なる種類のものであると言えるならば、幻覚からの議論の拡張段階は防御することができるのである。

しかし、その議論がうまく行くためには、真正な知覚的経験がどのようなもので、幻覚的経験がどのようなものかを示さなければならない。

Fish は、真正な知覚的経験の現象的特徴は、基本的には、環境にある事実の配列を主体に知らせるということであると言う。しかし、われわれは、環境からすべてを知覚しているわけではない。正面から見た看板と斜めから見た看板は違って見える。注意深く見ているときには見えるものも注意して見なければ見えないかもしれない。また、科学者と子供では見えるものが違うかもしれない。たとえば、同じ鳥を見ていても見えるものは違うかもしれない。彼は、そのことを認める。そして、主体の視点や視覚的鋭さの違い、主体の注意の所在の違い、概念把握能力 (conceptual-recognitional capacity) の違い等を考慮しなければならないとする。ここで彼が言う概念把握能力とは、維持され増加する情報に基づいて自分の行動の着手や制御ができ、環境についての情報入手・維持でき、情報を解釈でき、その状況に接近でき、維持され増加する情報に基づいていくつかの行為から行為を選択でき、目的を持つことができるということである。つまり、彼によれば、環境にある事実を主体に知らせるのが、視覚的経験の現象的特徴であり、「経験が主体に関係させる事実の特定の配置は、したがって、経験自体の現象的特徴は、環境にある対象と性質の分布、その環境における主体の場所や視点、視覚一般の本質と主体の視覚体系の特異性、主体の注意力の現在の分布、主体の概念的力によって決定される」³¹ ののである。

では、幻覚的経験はどのように説明されるのだろうか。Fish によれば、素朴実在論を守るためには、幻覚的経験が真正な知覚的経験と現象的特徴を共有していると考えずに、幻覚的経験を説明しなければならない。そしてその説明は、それが幻覚の真正な知覚からの区別不可能性と矛盾しないという制約と真正な知覚固有の説明を不必要だとはしないという制約を持っている。

Fish は、Martin の幻覚的経験についての説明には問題があるとする。一つ目の問題は、それが使っている「反省によって」という概念が曖昧であるという点である。先に見たように、証言によって得られた情報に基づいて区別できることは「反省によって」に含まれないとして

も、「反省によって」と認められるものは何かはまだはっきりしないというのである。また、「知ることができない」ということが条件に入っているので認識的洗練さを欠く生き物の幻覚を説明できなくなるという点も問題である(犬問題)。「知る」ということは、犬のように認識的に洗練されていない生き物の場合には適用されない、高度に認識的な作用であるから、「知ることができない」という条件で幻覚的経験を説明するとしたら、認識的洗練さを欠いている場合の幻覚的経験を説明できないというのである。そして、Fish は、それらの問題を逃れ、かつ、先の制約を満たしている説明として、「(1) 幻覚は、関係する種類の真正な知覚によって生み出されただろう判断もしくは信念を生み出すことに失敗してはならない。(2) 幻覚は、関係する種類の真正な知覚によって生み出されなかったらろう信念や判断を生み出してはならない」³² を挙げる。たとえば、私が、外に出て、池にカモがいると真正に知覚する場合、私は、池にカモがいるという信念と池にカモがいるのを見ているという信念を持つ。それと同様に、私が、外に出て、池にカモがいるという幻覚を持った場合、私は池にカモがいるという信念と池にカモがいるのを見ているという信念を持ち、池にハクチョウがいるという信念は持たないというのである。

その形式的定義として、Fish は、以下のものを示している。

すべての心的出来事 e に関して、(その主体における) 認識的影響 (cognitive effects) C を伴う doxastic setting D において、 e は以下のとき、そしてそのときにのみ、ある F の純粋な幻覚である。

- ・ e が現象的特徴を欠いている、
- ・ ある F の可能な真正な視覚的経験、 V がある。そして、それは、 D にあり、 C を生み出す合理的な主体を持っている。
- ・ C は空ではない。³³

そして、彼によれば、この定義のポイントは、区別不可能性それ自体の説明を与えているのではなく、ある心的出来事がある特定のときに真正な知覚から区別不可能であるなら、どのような条件を満たしていなければならないかを説明している点にある³⁴。

判断や信念は、認識的影響に含まれる。 V と同じ C を持つということによって、幻覚が真正な知覚から区別不可能であるということは説明できる。幻覚の場合、真正な知覚的経験と同じ判断や信念を生み出すのである。

Fish によれば、このように考えるならば、幻覚的経験が真正な知覚的経験から区別不可能であるということは、幻覚的経験が真正な知覚的経験と現象的特徴を共有していると考えることなく説明できる。幻覚の場合、真正な知覚的経験と同じ判断や信念（認識的影響）が生み出されるのである。また、彼によれば、そのことは、なぜ幻覚的経験が感じられた現実性を持つのかを説明することもできる。幻覚的経験が現象的特徴を欠くにもかかわらず、それは、真正な知覚的経験と同じ認識的影響を生み出しているの、幻覚の主体は、自分が現象的特徴を伴う経験を持っていると考えるのである。

もちろん、ここで、判断や信念も認識的影響に含まれるとしたら、それはやはり犬問題を引き起こすのではないかということも考えられる。しかし、それに対しては、Fish は、認識的影響は高階の信念だけに限らず、認識的洗練さを欠く生き物にも当てはまるような認識的影響があるという余地を残しているとして、犬問題は起きないとしている。

そのうえ、Fish によれば、そのように幻覚的経験を説明したからといって、真正な知覚経験固有の説明が不必要になるわけではない。なぜなら、幻覚的経験に現実性が感じられることは、幻覚の主体が真正な知覚をしていると信じていることによって得られるが、そのもととなる真正な知覚的経験に現実性が感じられることを、同じようには説明できないからである。

以上のようにして、Fish は、選言説をとり、幻覚的経験と真正な知覚的経験の主体による区別不可能性を認めた上で、素朴实在論を守ろうとしているのである。

しかし、ここで言っている素朴实在論を幻覚からの議論から守るためには、必ずしも選言説を採る必要はない。次に別の立場で素朴实在論を幻覚からの議論から守ろうとする考えを見てみたい。

6. Smith による素朴实在論擁護

Smith も、幻覚からの議論の拡張段階を防ぎ、幻覚からの議論から素朴实在論を守ろうとする。しかし、そのやり方は、Martin や Fish とは異なる³⁵。Smith は、幻覚している主体が知覚の場合と同じ何らかのものに気づいているということを認めたと、幻覚している主体が気づいているものが普通ではない対象（ここでの普通の対象は、たとえば外的対象）だということを否定することによって、素朴实在論（彼の言う直接实在論）を守ろうとするのである。

Smith の素朴实在論擁護の議論を理解するためには、

まず、知覚的経験と単に感覚（sensation）を持つことの、彼による区別を確認しておく必要がある。彼は、知覚的意識の源として、知覚的安定性（perceptual constancy）と「つまずき」（Anstoss）を挙げている。彼によれば、現象的三次元的空間性と、知覚された対象に関する感覚器官の動き（自己運動）が一緒になって、知覚的安定性が示される。たとえば、私が周りを見て目を動かすとき、私の視覚的経験の特徴は変化しているにも関わらず、私が観察しているもの、気づきの対象が、動いているとは思えない。また、「つまずき」とは、外部の対象によってわれわれの能動的な身体的動作が妨げられているのを感じるという現象のことである。気づきの対象はそれらを備えており、単なる感覚の流れ（the flux of sensation）は気づきの対象ではない。

以上のように、知覚的経験と単に感覚を持つこととを分けたうえで、Smith は、幻覚的経験の場合も、その現象的知覚の本質を構成するのは、純粋な知覚（彼によれば、真正な知覚と錯覚）的経験と同じものだと言う。つまり、幻覚的経験の場合も、知覚的安定性と「つまずき」が重要だと言うのである。

そのように、Smith によれば、知覚的経験の場合も、幻覚的経験の場合も、気づきの対象は、単なる感覚の流れではない。そうではなく、両方の場合の気づきの対象は、単なる感覚の流れを超えたものなのである。そして、彼によれば、幻覚の場合の気づきの対象は、真正な知覚の場合の知覚の対象と同じものなのである。そのように考えるならば、幻覚的経験と真正な知覚的経験が主観的に区別できないということは説明できることになる。それらは同じものに気づいているので、主観的に同一なのである。

しかし、Smith によれば、そのような気づきの対象は、認識者が対峙している対象、志向的对象であり、現実の普通ではない実体であるわけではない。それゆえ、センスデータ説のように、知覚的経験の場合と幻覚的経験の場合の気づきの対象を、共通の普通ではないものとして、素朴实在論を一般化する必要はないのである。彼によれば、たとえ同じ志向的对象が気づきの対象であるとしても、幻覚的経験と知覚的経験には違いがあるのである。彼は、次のように言っている。「真正に知覚された対象と幻覚された対象の間の違いは、後者が存在しない、もしくは現実でないということだけである。」³⁶ 彼によれば、「幻覚において存在しない対象に気づいているという事実から、われわれが真正に、もしくは錯覚的に知覚しているときはいつでも、そのような存在していないものに気づいていると推論する理由はない」³⁷ ののである。

以上のように、Smith は、確かに、幻覚している人は、何らかのものに気づいていなければならない、それはその現象的知覚の本質において、真正な知覚をしている人が気づいているものと同じであり、それゆえ、幻覚的経験と真正な知覚的経験は主観的に同一でありうるが、だからといって、現実の普通ではない実体が幻覚の対象であり、それゆえ、それが真正な知覚の対象でもあるとする必要はないと論じる。彼によれば、真正な知覚と幻覚は、現象的に同一である気づきの対象、志向的对象を持っている。真正に知覚された対象と幻覚された対象の違いは、幻覚された対象が存在しないということだけである。幻覚において存在しない対象に気づいているという事実から、真正な知覚の場合も、そのような存在しないものに気づいていると推論する理由はない。したがって、素朴実在論、直接実在論を否定することはできないのである。

7. 考察

前章までで見てきたように、Fish は、選言説を採り、共通のものに気づいているということを否定することによって素朴実在論を守ろうとしており、Smith は、志向的对象という共通のものに気づいているということを認める一方で、それが現実の普通ではない実体であるわけではないとすることによって、素朴実在論を守ろうとしていた。本論文での目的は、幻覚の存在にもかかわらず素朴実在論を擁護するための方策として選言説が一つの有効な選択肢になりうるということを論じることなので、これまでの考察を受け、以下において、その点について考えたい。

ここでの第一の問題は、それぞれの説で、真正な知覚的経験と幻覚的経験の区別不可能性を説明できるかということである。なぜなら、われわれは、幻覚的経験があるということを認める以上、真正な知覚的経験と幻覚的経験の一人称的な区別不可能性を認めざるを得ないからである。

Fish の場合、説明できるということに問題はない。彼によれば、真正な知覚的経験と幻覚的経験は、同じ認識的影響を生み出している、一人称では区別できないのであった。たとえば、目の前に猫がいるという幻覚的経験を持つ場合、目の前に猫がいるという真正な知覚的経験を持つ場合と同様に、目の前に猫がいるという信念と、自分が目の前に猫がいるのを見ているという信念を生み出しているとしていたのである。

また、Smith の場合も説明できるということに問題はない。彼は、気づきの対象として共通のもの、つまり、

同じ志向的对象を想定していた。真正な知覚的経験も幻覚的経験も同じ気づきの対象を持っているので、両者は区別不可能性なのである。たとえば、猫の幻覚的経験も真正な知覚的経験も同じ志向的对象を持っているので、それらは一人称では区別できないのである。

そのように、Fish の説と Smith の説は共に、真正な知覚的経験と幻覚的経験の一人称的な区別不可能性を説明できるので、その点においては優劣つけられないということになる。

次の問題は、それぞれの説が幻覚からの議論から素朴実在論を守ることができるかどうかである。つまり、真正な知覚的経験と幻覚的経験の一人称的な区別不可能性を認める一方で、幻覚的経験に関する素朴実在論の偽を真正な知覚的経験に広げるという幻覚からの議論の拡張段階を防ぐことができるかどうかということである。もし、ここで、センスデータ説のように、われわれの真正な知覚や幻覚の対象は外的対象とは異なる普通ではない実体であり、それは、外的世界を正確に写しているとは限らないとするならば、拡張段階を認めざるを得なくなる。

私は、その問題についても、Fish の説はうまく処理できると考える。なぜなら、彼は、真正な知覚的経験と幻覚的経験の区別不可能性を、両者に共通の要素を想定することなく説明していたからである。彼は、真正な知覚的経験と幻覚的経験が区別不可能であるとしても異なる種類のものであると言うことによって、幻覚的経験について真であることが真正な知覚的経験に広げられる必要はないと論じていたのである。彼によれば、真正な知覚的経験の現象的特徴は、基本的には環境にある事実の配列を主体に知らせるということである一方で、幻覚的経験は、その現象的特徴を持たない。そうではなく、幻覚的経験は、真正な知覚的経験と同じ判断や信念（認識的影響）が生み出されるということによって説明される。そのように考えるならば、真正な知覚的経験と幻覚的経験が一人称的に区別不可能であるとしても、拡張段階を認める必要はなく、素朴実在論は守られることができる。

では、Smith の説は、その問題を適切に処理できただろうか。彼は、真正な知覚をしている主体と幻覚している主体が同じものに気づいていると主張する一方で、その気づきの対象は実在している必要はなく、真正な知覚の対象は存在し、幻覚の対象は存在しないと言うことによって、幻覚の場合に素朴実在論が偽であるからと言って、真正な知覚の場合にその偽を一般化することはできないと論じていた。私は、実際、この場合も、真正な知覚的経験の素朴実在論は守られると考える。なぜなら、同じものに気づいているとする一方で、その同じ

ものが現実存在しているかどうかは異なりうる、また、現実存在している場合は外的世界を移しているとして、るので、拡張段階を防ぐことができているからである。

このように、Fish の説と Smith の説のどちらも幻覚からの議論から素朴実在論を守ることができ、その点に関しても、両者の説に違いはないことになる。

もちろん、両者とも、区別できないことの説明がなされている一方で、一人称で区別できない場合、幻覚的経験と真正な知覚的経験を実際にはどのように区別するのかについてははっきり述べていないという問題がある。

Fish は、真正な知覚的経験と幻覚的経験は、同じ認識的影響を生み出すとしていた。しかし、生み出された認識的影響が同じであることによって一人称的区別不可能性が説明されるとしたら、真正な知覚的経験と幻覚的経験の違いは、生み出された認識的影響によっては、つまり、生み出された信念や判断によっては説明されることができない。何によって説明されるのか。Martin の場合は、「反省によって」という言葉を入れることによって、それ以外の方法で区別可能であるという可能性を残していた。しかし、Fish の場合はそうではない。また、Smith は、マクベスがダガーの幻覚を持っているとき、マクベスは、現実のダガーも非現実のダガーも見えておらず、ダガーのように見える何らかのものを観ており、ダガーに見えるものが本当にダガーならそのときはダガーを知覚していると言っているが、ダガーに見えるものが本当にダガーであるのはどんなときかの詳しい説明はしていないのである。それに対して、私は、実際に知覚の議論として充実したものになるためには、その説明が必要だと考える。しかし、どちらもその説明をはっきりとはしていないので、現在問題としている、幻覚からの議論に対抗するものとして Fish の説と Smith の説のどちらが優れているかという問題に関しては、この点でも優劣を付けられるものではないと考える。

問題は、幻覚の場合に気づきの対象を認める必要があるのか、それとも、気づきの対象を認める必要はないのかという点にある。なぜなら、気づきの対象を認め、幻覚からの議論に反論するためには、気づきの対象を普通ではない実体と考えることはできないので、志向的对象を考えることは、気づきの対象を認めたくて幻覚からの議論に反論するための一つの有効な方法であると思われるからである。

Smith は、気づきの対象はいらないという極端な提案は間違っていると主張している。彼は、極端な提案自体は単独では信じがたいとして、それが、受け入れるべき理由を持っている他のテーゼに含意されているというこ

とを示すことによって、幻覚している主体が何らかのものに気づいているということを否定する方策を検討し、それも適切ではないと論じている。その際の他のテーゼとは、「もしわれわれがある対象に気づいているなら、…そのときは、われわれは、デレの思想、もしくはその対象についての判断を享受することができる」³⁸という橋原則 (Bridge Principle) を認めたくて、間違っ、自分たちが何らかのものを考えているという印象のもとにすることがありうるということを主張する考えである。

では、この思想についての主張は、幻覚している主体が何らかのものに気づいていることの否定を含むのだろうか。Smith によれば、確かに、橋原則によって、幻覚の場合デレの思想が可能ではないと示せるなら、幻覚している主体が何らかのものに気づいているということを否定できるように思える。しかし、実際はそれだけでは不十分である。なぜなら、幻覚している主体は普通の対象とは違う何らかのものに気づいていると主張する余地が残されているからである。それゆえ、極端な立場をとることを支持する他の主張、実在する対象がないときは知覚的判断を理解することができないという主張が必要である。彼によれば、この主張は、制限された意味での表現可能性のテーゼ（言語能力がある主体は、自分が何かに気づいているという事実表現を与えることができる）と理解可能性のテーゼ（有意味な言語的な発話は理解されることができる）からなっている。幻覚している主体が何らかのものに気づいているなら、橋原則により、その主体は気づきの対象についてのデレの判断ができ、表現可能性のテーゼと理解可能性のテーゼにより、その判断は表現され理解されなければならないが、気づきの普通の対象がない場合には、知覚的判断の表現の理解はできないので、幻覚の場合、主体はどんな対象にも気づいていないというのである。つまり、彼によれば、幻覚の場合、幻覚している主体がその気づきの対象を理解可能な形で表現できないということが示されるならば、先の思想についての主張は、幻覚している主体が何らかのものに気づいていることの否定を含むことになる。

しかし、Smith によれば、実在する対象がないときに知覚的判断を理解することができないと考えるのは、間違っている。その一つの根拠として、彼は、話し手が会話の中で与える証言 (testimony) によって、聞き手は幻覚された対象について考えることができるということを挙げている。たとえば、「私は幻覚している。私は実際にはそこに何も無いことを知っているが、私はテーブルの真ん中に花瓶があるのを見ているように思っている。私の視野の中心には明らかに花瓶の形をしたこのも

の「それは赤い」³⁹と幻覚している人が言うとき、聞き手は幻覚された対象について考えることができると言うのである。

橋原則が幻覚している主体が何らかのものに気づいているということの否定を含んでいないというのはもっともである。それは、Smith の言うように、幻覚している主体は普通の対象とは違う何らかのものに気づいていると主張する余地を含んでいる。橋原則が、幻覚の場合気づきの対象はいらないということを含むためには、デレの思想のために気づかれていなければならない対象だけが、気づきの対象であるということを前もって前提していなければならない。それゆえ、橋原則が気づきの対象はいらないという主張を含むためには、他の主張が必要であるということももっともである。そのうえ、実在する対象がないとき相手が言っていることを理解できないというのは間違っているということにも同意する。幻覚の報告を聞いている人は、幻覚の対象についての話を理解することができる。

けれども、そもそも選言説論者は、幻覚している主体が何らかのものに気づいていることを否定するために、橋原則を経由する必要があるのだろうか。そして、橋原則にそのことを含意させるために、表現可能性のテーゼや理解可能性のテーゼを主張する必要があるのだろうか。選言説論者たちは、自分たちの考えでは橋原則が成り立っていることは認めるだろう。しかし、橋原則が幻覚の場合の気づきの対象の否定を含むから、幻覚の場合は気づきの対象を必要としないと考えているのではないだろう。選言説論者にとっては、幻覚の場合気づきの対象を否定することと橋原則は両立しうると考えるだけで十分である。選言説論者たちは、幻覚が表現不可能だとも、理解不可能だとも考えていない。選言説論者であるならば、その表現は、幻覚された対象を必要としないと言うだろう。幻覚された対象がなくとも、幻覚的経験を理解することができるというのが、選言説論者の考えだからである。

そもそも幻覚の場合に、気づきの対象はいらないという提案は、それほど極端なことだろうか。Smith は、気づきの対象はいらないという極端な提案自体は単独では信じがたいと主張していたが、そのような主張が適切であるということには、はっきりとした根拠がないように思われる。

Smith は、何か媒介的なものに気づいていると言うのは、われわれにとって普通のことであるということによって、志向的对象を要請することができると考えているように思われる。しかし、何か媒介的なものに気づい

ているという表現を使うことと、気づかれている何か媒介的なものが本当にあるということとは別のことである。たとえば花瓶の幻覚的経験を持っているときに、私は花瓶のように見えるものに気づいていると言うのは普通だということは、私には花瓶のように見える何らかの媒介的なものがあるということと同じではないのである。確かに、われわれは、誰もいない部屋で愛しい人の幻覚を見たというかもしれないが、それは、愛しい人の幻覚がどこかに存在しなければならないということを含まないものである。それゆえ、何か媒介的なものに気づいていると言うことが普通であるということは、志向的对象を必要とする理由にならないだろう。

実際、選言説は、何らかの媒介的な対象を否定しているだけであり、花瓶のように見えるものがあると私には見えるということ自体を否定しているわけではなかった。そして、選言説は、媒介的な対象を要請することなしに、幻覚的経験と真正な知覚的経験の区別不可能性を説明していたのである。そのように考えるならば、われわれが幻覚的経験を持っていることを認めるからといって、実在の物的対象とは別のものを想定する必要はない。

先に見たように、志向的对象を想定しても想定しなくとも、素朴実在論を幻覚からの議論から守ることができ、また、幻覚的経験と真正な知覚的経験の区別不可能性を説明することができ、現在の経験が幻覚か真正な知覚かを区別する方法の考察が必要だとしたら、幻覚からの議論に対する反論という視点からは、Fish の選言説と Smith の志向説は等価値である。そして、志向的对象を想定することが、志向的对象を想定しないことより自然であるということによっては、Smith の説が Fish の説より優れているということとはできない。そして、私は、等価値であり、志向的对象を想定する強い理由もないならば、わざわざ媒介的对象を持ってくる必要はないと考えるのである。

8. おわりに

本論文では、幻覚の存在にもかかわらず、素朴実在論を守ることためには、知覚についてのどのような考えが適切なのかについて考察してきた。そのために、まず、第二章で、本論文では素朴実在論という言葉をどのように使うのかを説明した。次に、第三章では、Snowdon の見解を受けた Fish の定式化や Smith による定式化を参考に、素朴実在論に反対する幻覚からの議論がどのようなものであるかを確認した。それから、第四章では、選言説について説明し、それを受けて、第五章では選言

説による素朴实在論擁護を、第六章では Smith による素朴实在論擁護を整理した。そして、第七章では、幻覚からの議論から素朴实在論を守るための議論として、Fish の選言説による擁護よりも Smith の説による擁護の方がより適切であると言うことはできないと論じた。もちろん、ここで論じてきたことは、Fish に代表されるような選言説が志向的对象を考える Smith の説より有利であるという強い理由を示してはいない。そのためには、幻覚からの議論を防げるかという視点だけでなく、幻覚についてわれわれが言いたいことを選言説による幻覚的経験の特徴づけですべていえるのかという視点での議論⁴⁰が必要である。それは今後の課題としたい。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 253700050002 の助成を受けたものです。

注

- ¹ 代表的な議論としては、Ayer が整理したと言われる「錯覚からの議論」がある。Ayer, A. J. *The Problem of Knowledge*. London, Macmillan and Company Limited, 1956. (Ayer, A. J. (神野慧一郎訳) 知識の哲学. 東京, 白水社, 1981.)、Ayer, A. J. *The Foundations of Empirical Knowledge*. London, Macmillan and Company Limited, 1958. (Ayer, A. J. (神野慧一郎, 中才敏郎, 中谷隆雄 訳) 経験的知識の基礎. 東京, 勁草書房, 1991.)。なぜ間違いであると論じられるかについては、本論文の第三章で詳しく論じられる。
- ² 感覚的経験を持つとき、人が気づいている経験の対象として考えられたものであり、感覚に与えられている対象ということ。そのため、感覚与件とも呼ばれる。
- ³ 錯覚の場合については、以前論じたことがある。横山 幹子. 「錯覚からの議論」と選言説. 図書館情報メディア研究. vol. 9, no. 2, 2011, p.1-14.
- ⁴ Hinton, J. M. *Experiences*. Oxford, Oxford University Press, 1973.
- ⁵ 選言説は、Hinton 以来、Snowdon (Snowdon, P. *Perception, Vision and Causation. Proceedings of the Aristotelian Society*. New Series Vol. 81, 1980/81, p.175-192. 等)、McDowell (McDowell, J. *Criteria, Defeasibility, Knowledge. Proceedings of the British Academy*. Read 24 November, 1982, p.455-479. 等)、Martin (Martin, M. G. F. *The Transparency of Experience. Mind & Language*, vol. 17, no. 4, September, 2002, p.276-425. 等) によって主張され、さまざまに論じられている。また、選言説自体も、経験的選言説や認識論的選言説、現象的選言説 (形而上学的選言説) 等、選言説を主張する際の主な関心事によって、さまざまに分類されている。素朴实在論との関係で問題になるのは、現象的選言説もしくは形而上学的選言説と呼ばれるものである。
- ⁶ Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. Oxford, Oxford University Press, 2009. Fish, W. “Disjunctivism, Indistinguishability, and the Nature of Hallucination”. *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*. Haddock, A.; Macpherson, F. ed. Oxford, Oxford University Press, 2008, p.144-167.
- ⁷ Nudds, M. Recent Work in Perception: Naïve Realism and its Opponents. *Analysis Reviews* vol.69, Number2, April 2009, p.334-346.
- ⁸ 小暮泰. 知覚の志向説と選言説. 科学哲学. vol. 42, no. 1, 2009, p.29-49.
- ⁹ 横山 幹子. 選言主義における否定的認識論について. 図書館情報メディア研究. vol. 7, no. 2, 2009, p.19-32.
- ¹⁰ 横山 幹子. 選言主義、幻覚、区別不可能性: Fish の提案. 図書館情報メディア研究. vol. 8, no. 2, 2010, p.15-27.
- ¹¹ Smith, A. D. *The Problem of Perception*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 2002.
- ¹² もちろん、Smith の議論との比較検討だけでなく、他の立場、特に、表象説 (志向説) 一般との比較検討も必要である。それは、今後の研究の課題である。
- ¹³ Snowdon, P. “How to Interpret ‘Direct Perception’”. Crane, T. ed. *The Contents of Experience*. Cambridge, Cambridge University Press, 1992, p.68.
- ¹⁴ 特に、Martin, M. G. F. *The Transparency of Experience*. p.276-425. 参照。
- ¹⁵ Martin, M. G. F. *The Transparency of Experience*. p.393.
- ¹⁶ *Ibid.* p.378.
- ¹⁷ Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. p.16.
- ¹⁸ *Ibid.* p.16.
- ¹⁹ *Ibid.* p.16.
- ²⁰ Smith, A. D. *The Problem of Perception*. p.22.
- ²¹ もちろん、知覚の失敗を認めても本論文での素朴实在論を主張できるということと、外的対象等を知覚的経験の構成要素であると考えするという意味での形而上学的な素朴实在論が正しいということは別のことである。後者に関しては、また別のところで論じられなければならない。

- ²² Snowdon, P. "How to Interpret 'Direct Perception' ". p.68.
- ²³ Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. p.29-33.
- ²⁴ Smith, A. D. *The Problem of Perception*. p.194.
- ²⁵ Martin, M. G. F. The Transparency of Experience. Martin の考えについてのまとめとしては、Haddock, A.; Macpherson, F. ed. *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*. Oxford, Oxford University Press, 2008. も参照した。
- ²⁶ Martin, M. G. F. The Transparency of Experience. p.378.
- ²⁷ Martin, M. G. F. "On Being Alienated". *Perceptual Experience*. Gendler, T. S.; Hawthorne, J. ed. Oxford, Oxford University Press, 2006, p.357.
- ²⁸ *Ibid.* p.363.
- ²⁹ *Ibid.* p.369.
- ³⁰ Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. p.36-37.
- ³¹ *Ibid.* p.75.
- ³² *Ibid.* p.94.
- ³³ *Ibid.* p.94. 強調原著者。以下同じ。ここでは、doxastic setting とは、背景となる信念や欲求や他の心的状態を意味する。
- ³⁴ 同様の議論は、「選言主義、区別不可能性、幻覚の本質」でもなされている。そこでは、「幻覚は、ある心的状態である。そして、その心的状態は、ある種のものの真正な知覚ではない一方で、その種のものの真正な知覚なら持っただろう影響と十分に類似した影響を持つ心的状態である」(Fish, W. "Disjunctivism, Indistinguishability, and the Nature of Hallucination". p.155.) と述べられている。
- ³⁵ Smith 自身は、直接実在論を幻覚の議論から救う道を「志向説」と呼んでいる (Smith, A. D. *The Problem of Perception*. p.234.)。なぜなら、それは志向的对象を認めているからである。ただし、表象説は、志向説と呼ばれることもあり、志向説は、ここでの志向説とは異なるものを意味することがある。混乱を避けるため、ここでは、志向説という言葉を使っていない。
- ³⁶ Smith, A. D. *The Problem of Perception*. p.234.
- ³⁷ *Ibid.* p.236.
- ³⁸ *Ibid.* p.211.
- ³⁹ *Ibid.* p.220.
- ⁴⁰ たとえば、Dancy, J. Arguments form Illusion. *The Philosophical Quarterly*, vol. 45, no. 181, 1995, p.421-

438. や King, P. R. Perception, Hallusination, and Illusion. *Philosophical Psychology*, vol. 23, no. 5, 2010, p.715-719. 等の議論が参考になると考える。

参考文献

- Ayer, A. J. *The Problem of Knowledge*. London, Macmillan and Company Limited, 1956. (Ayer, A. J. (神野慧一郎訳) 知識の哲学. 東京, 白水社, 1981.)
- Ayer, A. J. *The Foundations of Empirical Knowledge*. London, Macmillan and Company Limited, 1958. (Ayer, A. J. (神野慧一郎, 中才敏郎, 中谷隆雄 訳) 経験的知識の基礎. 東京, 勁草書房, 1991.)
- Crane, T. ed. *The Contents of Experience*. Cambridge, Cambridge University Press, 1992, p.48-78.
- Dancy, J. Arguments form Illusion. *The Philosophical Quarterly*, vol. 45, no. 181, 1995, p.421-438.
- Fish, W. "Disjunctivism, Indistinguishability, and the Nature of Hallucination". *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*. Haddock, A.; Macpherson, F. ed. Oxford, Oxford University Press, 2008, p.144-167.
- Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. Oxford, Oxford University Press, 2009.
- Gendler, T. S.; Hawthorne, J. ed. *Perceptual Experience*. Oxford, Oxford University Press, 2006.
- Haddock, A.; Macpherson, F. ed. *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*. Oxford, Oxford University Press, 2008.
- King, P. R. Perception, Hallusination, and Illusion. *Philosophical Psychology*, vol. 23, no. 5, 2010, p.715-719.
- McDowell, J. Criteria, Defeasibility, Knowledge. *Proceedings of the British Academy*. Read 24, November, 1982, p.455-479.
- Martin, M. G. F. The Transparency of Experience. *Mind & Language*, vol. 17, no. 4. September, 2002, p.276-425.
- Martin, M. G. F. "On Being Alienated". *Perceptual Experience*. Gendler, T. S.; Hawthorne, J. ed. Oxford, Oxford University Press, 2006, p.354-410.
- Nudds, M. Recent Work in Perception: Naïve Realism and its Opponents. *Analysis Reviews* vol.69, Number2, April 2009, p.334-346.
- 小草泰. 知覚の志向説と選言説. 科学哲学. vol. 42, no. 1, 2009, p.29-49.
- Smith, A. D. *The Problem of Perception*. Cambridge,

- Massachusetts, Harvard University Press, 2002.
- Snowdon, P. Perception, Vision and Causation. Proceedings of the Aristotelian Society New Series Vol. 81, 1980/81, p.175-192.
- Snowdon, P. "How to Interpret 'Direct Perception'". The Contents of Experience. Cambridge, Crane, T. ed. Cambridge University Press, 1992, p.48-78.
- 横山幹子. 選言主義における否定的認識論について. 図書館情報メディア研究. vol. 7, no. 2, 2009, p.19-32.
- 横山幹子. 選言主義、幻覚、区別不可能性：Fish の提案. 図書館情報メディア研究. vol. 8, no. 2, 2010, p.15-27.
- 横山幹子. 「錯覚からの議論」と選言説. 図書館情報メディア研究. vol. 9, no. 2, 2011, p.1-14.
- (平成 25 年 9 月 26 日受付)
- (平成 26 年 1 月 14 日採録)